

複合社会の形成原理に関する基礎研究

1. 研究組織

研究代表者：水島 司（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助教授）

研究分担者：三尾 裕子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助教授）

佐藤 哲夫（駒沢大学文学部・助教授）

永田 淳嗣（東京大学教養学部・助手）

2. 研究のねらい・目的

本研究の代表者は、昭和63年度から開始された「多民族国家における異化同化形態の比較研究」プロジェクト（アジア・アフリカ言語文化研究所：主査 水島司）、平成3～4年度の国際学術研究「多民族国家マレーシアにおける『共同体』の比較研究」（研究代表者：宮崎恒二）、および平成5～6年度の同「多民族国家マレーシアにおける『文化生態』の総合的研究」（研究代表者：菱口善美）と関連して、マレーシアを構成する民族諸集団の相互接触と国民文化形成のダイナミズムを総合的に解明し、多文化接触のモデルを作り上げる努力をしてきた。そして、その関連で、マレーシア国立文書館、シンガポール国立大学図書館、およびシンガポール国立文書館から750本前後のマイクロ・フィルムを収集した。そこには、官報、政府報告書、新聞など、マレーシア社会全般にわたるさまざまな内容の記録が含まれている。本研究は、これらの資料を用いて、マレーシアという代表的な複合社会の形成過程を実証的に解明するための基礎データを統合化することを目的としている。

具体的には、マイクロ・フィルム形態の政府公文書や新聞、各種出版物・研究書等に記載されている地図や統計その他をヴィジュアルな形で入力し、それらを分類・整理することによって、1850年前後から今日までの10年毎の情報地図を作成する。こうした作業によって、利用しにくい諸情報が、単にヴィジュアルな形で示されるだけでなく、コンピューターの上でハイパー・テキスト化されることにより、年代別、テーマ別に、総合的な情報把握と分析が可能になると期待したのである。作業の結果提示されるであろう成果は、タイム・シリーズの多数の視覚資料であり、今後多くの研究者に利用されうと思われる。

この研究に参加したのは、インド、台湾、日本、タイ、バングラデシュ等をフィールドとし、ディシプリンを異にする研究者である。このような研究者が、マレーシアを対象として基礎的な作業を行なうことによって、今後の研究への確固とした視点を築こうというねらいも本研究はもっている。



河を渡る舟は住民の足

3. 平成5年度の研究経過

平成5年度には、まずアルバイターがマイクロ・フィルムのプリント作業をアジア・アフリカ言語文化研究所のリーダー・プリンターを利用して進めた。また、パソコンのハードはマッキントッシュとし、ソフトはi-Servという画像処理ソフトウェアを選択し、今後最も利用しやすいと考えられる分類

項目作りを行った。この作業と関連して、研究参加者のうち、水島、永田、佐藤の3名が国際学術研究「多民族国家マレーシアにおける『文化生態』の総合的研究」（研究代表者：菱口善美）に参加して調査研究と資料収集を行った。

4. 研究の成果とフロンティア

本年度は、初年度であり、マイクロのプリントとデータ分析の手法の確立が主な作業であり、入力されたデータを系統化するというレベルには至っていない。

5. 今後の課題

来年度は、プリント作業を継続するとともに、人口、都市、集落、道路、行政区分、鉱山、エステート、灌漑網などの基礎的なデータに関して、10年毎の単位で情報地図を作成し、その利用によってどのような議論ができるかを模索する。それができた段階で、続いて情報地図の内容を多様化させる。インド人の場合はカースト団体、華人の場合は会館や同姓会、マレー人の場合は農民団体など、より複合社会の形成というテーマに近接した情報を、情報地図の中に埋め込む手法を確立する。

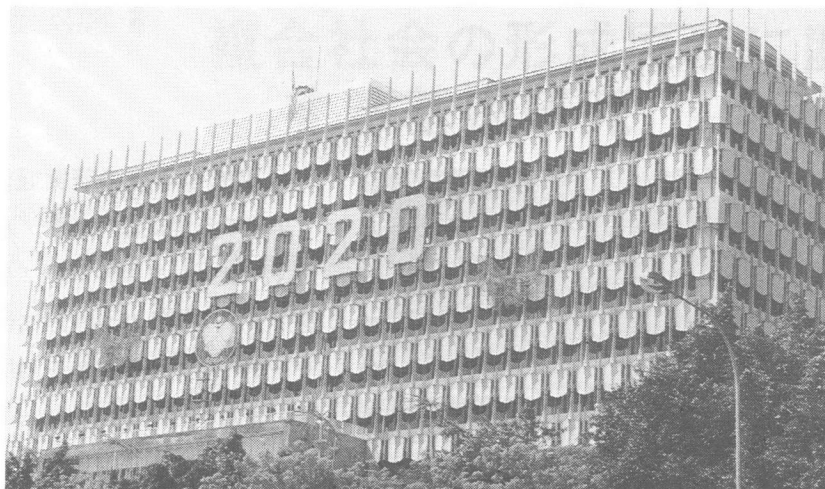
6. 研究業績（平成5年度発表分）

水島 司

『シンガポールのマイクロフィルム＝コレクション』（マレーシア社会論集3）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1993.

『マレーシア』（水島司編著）河出書房新社、1993.

「スルタン主催の乱痴気」『総合的地域研究』No.2:15-17, 1993.



2020の標語を飾る放送局



今もエリートを輩出し続けるマレーカレッジ



マレーシア国立文書館